

詞章

能【觀世流】

淡路

【冥ノ次舞】

ワキ/ワキツル 治まる國の始めもや、治まる國の始めもや、淡路の神代なるらん。

ワキ そもそもこれは当今に仕へ奉る臣下なり、さて我相願の子細あるにより、住吉玉津島に参詣仕りて候、またこれより淡路の國に渡り、神代の古跡をも一見せばやと存じ候

ワキ/ワキツル 紀の海や、波吹上の浦風に、波吹上の浦風に、後遠さかる沖つ舟、汐路程なく移り来て、よそに霞みの鳥影や、淡路渦にも着きにけり、淡路渦

にも着きにけり。  
ワキ 急ぎ候ふ程に、これははや淡路の國に着きて候、人來たつて何事も尋ねうするにて候

ワキツル 然るべう候

【冥ノ一声】

シテ/ツレ 神の代の、跡を残して海山の、のどけき波の、淡路渦。

ツレ 種を収めし國なれば、

シテ/ツレ 苗代水も、ゆたかなり。

シテ それ陰陽の神代より、今人界に至るまで、

シテ/ツレ 山河草木國土は皆、神の恵みに作り田の、雨土塊をうるほして千里万里の外までも、皆樂しめる時とかや。

シテ/ツレ 頃しも今はのどかなる心の池の言ひがたき春の気色もさまざまに。

シテ/ツレ 春の田を、人に任せて我はただ、人に任せて我はただ、花に心のあこがるる、盛りに引かれて苗代の水に心の種蒔きて、散ればこもぎ桜田の、雪をかへす景色かな、雪をかへす景色かな。  
ワキ いかこれなる老人に尋ねべ

き事の候。おことの風情を見るに、小田をかへしながら水口に幣帛を立て、誠に信心の気色なり、いかさまこれは御神田にて候ふか

シテ さん候、春の田を作らんとては、よろろつ祝ふ事の候ふ程に、あの水口に五十串とて、五十の幣帛を立て神を祭り候、しかればある歌に、谷水を堰く水口に五十串立て、苗代小田の種蒔きにけり、その上この御田は当社一の宮の御伊田にてござ候ふ程に、殊には内外清浄にて御田を作り候ふよ

ワキ さて当社は一の宮にてましまさば、國の一の宮はいつくにてましますぞや、もし讒業の權現にてもや候ふらん

シテ おそれながら悪しく御心得候ふものかな、当社は一の宮にてましますとて、國中一二の次第にあらず

ツレ ご覽候へ当社の神選、二柱の社の御殿なれば

シテ 二つの宮居をそのままにて、一の宮と崇め奉るなり

シテ/ツレ これはすなはち伊弉諾伊弉冉の尊の二柱の、神代のままだに宮居し給ふ、淡路の國の神は一宮宮居は二つの、一の宮と崇め申すなり

ワキ げにげに聞けばありがたや、さてさてかかる國土の種を、普く受くるご恩徳、ただこの神の誓ひよなり

シテ 事新しき御話かな、國土世界や万物の、出生善きご神徳、ただこれ当社の誓ひなり

ツレ 然れば開けし天地の、伊弉諾と書いては

シテ 種蒔くと読み

ツレ 伊弉冉と書いては

シテ 種を収む

ツレ これ目前の御誓ひなり

シテ その上神代は遠からず

ツレ いま目の前にも

シテ ご誓きよ

地謡 種を蒔き、種を収めて苗代の、種を収めて苗代の、水うららにて春雨の、天より降れる種蒔きて、國土も豊かに千里染うる青草の豊穡の秋になるならば、種を収めん神徳あらありがたの

誓ひやな、ありがたの神の誓ひやな。

ワキ なほなほ当社の譚はれ懸るに語られ候へ

〈クリ〉

地謡 それ天地開闢の昔より、混沌未分漸く分かれて、清く明らかなるは天となり、重く濁れるは、地となれり。

〈サシ〉

シテ 然れば天に五行の神まします、木火土金水これなり

地謡 すでに陰陽相分かれて、木火土の精伊弉諾となり、金水の精凝り固まつて伊弉冉と現る

シテ 然れども未だ世界ともならずりし前を伊弉諾といひ

地謡 國土治まり万物出生する所を伊弉冉と申す、すなはちこの淡路の國を、始めとせり。

〈ケセ〉

地謡 さればにや二柱の御神の、磯の歌鷹島と申すもこの一島の事かたよ、およそこの島始めて、大洲の國を作り、紀の國伊勢志摩日向ならびに、四つの海岸を作り出だし、日神月神豊玉素

我と申すは、地神五代の始めにて、皆この島にご出現。中にも皇孫は、日向の國に、天降り給ひて、地神第四の火女出見の皇子をこ出生げにありがたき代々とかや。

シテ 天下を保ち給ふ事、

地謡 すべて、八十三万、六千八百余歳なり、かかるめでたき皇孫に、御代を讒業の權現と、現れおはします、伊弉諾伊弉冉の神代もただ今の、國土なるべし。  
地謡 げに神の代の道直ぐに、げに神の代の道直ぐに、今も妙なる秋津洲の、君の御影ぞありがたき、

シテ 御影ぞと、夕日隠れの雲の端に、たなびく天の浮橋の、古くを現して、御客人を慰めん、

地謡 その浮橋の古くと、聞くはかなる言の葉の、

シテ その神歌は鳥羽玉の、我が黒髪も、

地謡 乱れずに、結び定めよ小夜の手秋の歌の種蒔きし、神とも今は白波の、淡路山を浮橋にて天の、戸を渡り失せにけり、天の

戸を渡り失せにけり。  
(中人)

所の者(アイ)が登壇し、臣下の求めに応じて二の宮の由緒について語る。そして、さきに臣下が出会った老人(シテ)はイサナギの化身であろうと言ひ、祈念して奇特を見ることを勧める。

ワキ/ワキツル げに今とても神の代の、げに今とても神の代の、御蔭はあらたなりけりと、言へば虚空に夜神樂の、月に聞こえて光さず、気色ぞあらたなりけるや、気色ぞあらたなりける。

【出還】

シテ 神の神頭にさせる白玉の、波もて結へる淡路島、月春の夜もどかなる、緑の空も澄み渡る、天の浮橋の上にして、八洲の國を求め得し、伊弉諾の神とは我が事なり。

シテ 治まるや、國神立の始めより

地謡 七つ五つの神の代の

シテ 御蔭は今に、君の代より

地謡 和光守護神の扶桑の御國に、風は吹けども山は動ぜず。

【神舞】

地謡 げにありがたき御誓ひ、げにありがたき御誓ひ、そもそも天の浮橋の、そのご出所はさるにても、いかなる所なるらん

シテ ぶり下げし、矛の滴り露凝りて、一島となりしを、淡路よと

見つけしこご浮橋の下ならん、

地謡 げにこの島の有様東西は海に

漫々として、

シテ 南北に雲霧を連れ、

地謡 宮殿にかかる浮橋を、

シテ 立ち渡り舞ふ雲の袖、

地謡 さすは御矛の手風なり引くは、潮の時つ風治まるは波の音原の、國富み民も豊かに万歳を誦ぶ松の聲、千秋の秋津洲、治まる國ぞ久しき、治まる國ぞ久しき。

(土庫に懸し、観舞に多少の異曲もある舞臺)  
もごりま、あらかじり二葉くまらひ)